国際研究集会
「日欧における中世修道制史研究の過去と現在」

大貫　俊夫

ここに掲載しているものは、2019年3月4日に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された国際研究集会「日欧における中世修道制史研究の過去と現在」の講演原稿である。この研究集会は、3月1日、2日に岡山大学で開催された国際シンポジウム「司牧と修道制：800～1650年」とともに、日本学術振興会の国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）「修道院と教区共同体の相互影響関係と社会形成に関する比較研究（国際共同研究強化）」（15KK0051、代表：大貫俊夫）と基盤研究（C）「中近世ヨーロッパにおける司牧活動に関する諸修道会の比較研究」（18K01031、代表：大貫俊夫）の助成を受けて実現したものである。およそ2週間にわたりドレスデン工科大学の比較修道会史研究所（Forschungsstelle für Vergleichende Ordensgeschichte、FOVOG）から所長（当時）のゲルト・メルヴィル教授、学術研究員のミルコ・ブライテンシュタイン博士（現所長）、イェルク・ゾンターク博士を日本に招聘し、中近世キリスト教修道制史に関わる日本側の研究者と濃密な交流が行われた。本稿はその様子の再現である。

ゲルト・メルヴィル教授が所長を務める比較修道会史研究所は、ミュンスター大学でのDFGプロジェクトを基盤として2005年にアイヒシュテット・カトリック大学で創設され、2010年以降、ドレスデン工科大学で精力的に研究活動を続けてきた。本研究集会の第一の目的は、この研究所の取組みを日本に紹介することであった。メルヴィル教授による第一講演は、ヨーロッパで中世修道制史研究を先導する氏が実践してきた研究の手法と目的を詳しく紹介することで、足かけ30年にわたる研究所の諸活動を振り返るものになっている。

一方、日本においても、20世紀後半からキリスト教修道制は西洋中世史研究の重要な柱のひとつになっていた。しかし、日欧間でのコミュニケーションが個人レベルにとどまっていたこともあり、日本には卓越した研究が蓄積されて

きたが、言語障壁ゆえにこれが国内でのみ共有されていた。そこで、研究環境のグローバル化が進行する今、日本でこれまで中世キリスト教修道制研究がいかなる目的・方法で営まれてきたかを振り返り、これをヨーロッパで第一線で活動している研究者とのあいだで共有することが求められる。これが本研究集会のもう一つの目的であった。そこで、第二講演として日本で中世修道制研究を牽引してきた杉崎泰一郎教授（中央大学）にご登壇いただいた。氏はクリュニー修道院とカルトジオ会を主たる研究対象にし（『12世紀の修道院と社会』）、2015年には『修道院の歴史――聖アントニオスからイエズス会まで』（創元社）を上梓し、長年にわたりドイツやフランスの研究者と交流を続けてきた。

当初の目論見通り、お二人の講演を通じて日欧の研究の営みについて相互理解が深まり、講演後の質疑応答も大変活発なものであった。過去を振り返ることにくわえ、研究環境がグローバル化した21世紀にどのような研究の形態・方向性があり得るのかについて議論がなされたことの意義は非常に大きい。本研究集会が開催されてから５年が経つが、中世修道制史に関する国際共同研究はコロナ・パンデミックの渦中にあってもダイナミックに進展しており、その動向を象徴しているのが2022年７月に比較修道会史研究所が中心となって結成されたGlobal Association for Historical Research of Monasticism（GARMon）である[1]。ここにはヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、日本から19名のメンバーが名を連ねており、日本からは大貫、赤江雄一（慶應義塾大学）、武田和久（明治大学）がその構想段階から参画・協力してきた。定期的なシンポジウムの開催、サマースクールの実施、大学院生に対する研究滞在支援を活動の三本柱とするこのグローバル・アソシエーションが、今後どのような国際共同研究を展開するか注視していきたい。

[1] 詳細は同研究所のウェブサイトに開設された特設ページ（https://tu-dresden.de/gsw/fovog/garmon）を参照のこと。

西欧の中世修道制比較史に対する新たなアプローチ：「ドレスデン学派」

ゲルト・メルヴィル
大貫　俊夫訳

ドレスデン工科大学における我々「比較修道会史研究所」（Forschungsstelle für vergleichende Ordensgeschichte、以下 FOVOG）の研究分野と手法を、慶應義塾大学のような著名な大学で紹介できることは格別な栄誉です。中世ヨーロッパの修道院世界に関する我々の研究の道すじを一緒にたどるためにお時間を割いて下さり嬉しく思います。我々の分析的アプローチの特徴に興味を持っていただくために、十分わかりやすく説明ができることを願っております。そのために、以下の段階を踏んで進めて参ります。まず（1）本研究所の特徴について簡潔に説明し、（2）我々の手法と関心、そして修道院世界に関する特有の理解についていくつかの支柱を説明し、そして最後に（3）我々の研究分野の例を通じて具体的な研究手法をより詳しく紹介できれば幸いです。

FOVOG は、2010年にドレスデン工科大学で設立されました。私が代表を務める修道院生活の歴史を扱った研究組織の長い鎖のうち、これが一番新しい輪ということになります。80年代半ば以降の私の個人研究、とくに中世後期のクリュニー修道院に関する研究に基づいて、私は1992年にミュンスター大学で「特別研究領域（Sonderforschungsbereich）」の枠組みのなかに一つの研究プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトは、修道制の合理的な組織が用いるツールとして、修道院の書字形式（たとえば定式文、総会決議文、登録簿など）を扱うものでした。この時期に主な出版物が 2 冊、すなわち様々な修道会の幅広い比較に基づいた巡察と総会の機能に関する研究が刊行されました。1996年から2008年まで、同じく私が代表を務める「特別研究領域」の枠組みのなかに二つの研究プロジェクトがありましたが、これはドレスデン工科大学で行われました。それ以後は、中世の修道会と修族の全体を広範に見すえ、修道院生活の制度的メカニズムをより根本的に扱うことになりました。この時期には重要

な基礎的研究、たとえば二人ともここに出席していますが、修練士に関するミルコ・ブライテンシュタイン博士の著作や、修道院の儀礼に関するイェルク・ゾンターク博士の著作も完成しました。その頃、修道制に取り組むうえでの方法論が成立・完成し、これが現在国際的に「ドレスデン学派」と呼ばれているものになります。その継続した形が今日の FOVOG であり、そのため30年近くの伝統を受け継いでいることになります。長期にわたる研究の継続が目に見える形であらわれているのが、一方で FOVOG が編纂している現在 2 部門80巻におよぶ学術叢書「ウィタ・レグラーリス（Vita regularis）」です。ここにカタログがあります。この多言語のシリーズは制度史的観点を前面に押し出しており、とくに組織と規範の諸現象、精神的・実践的な指導原理ならびに歴史的変化における社会的・精神的環境との関連をテーマにしています。他方、すでに完了し、また現在進行中の大量のサブプロジェクトについても言及する必要があり、なかでも著名な機関、たとえばザクセンやハイデルベルクのアカデミー、教皇庁歴史科学委員会、あるいはヨーロッパ、北米、南米、オーストラリアのさまざまな国外の大学との緊密な関係のなかで進められているものがあります。今こうして日本で実現しつつあるように、さらに連携を広げることができたら嬉しく思います。

〔三角形の〕三つの頂点が我々の研究を形作っています。(1) 我々の分析の目的は、事実としての出来事の連続性の再構築ではなく、むしろ構造的な相関関係の再構築である。(2) 構造的な相関関係を認識して評価するためには、具体的な状況の抽象化、すなわち他の修道院の状況との比較によってのみ達成され、定義されるような抽象化が求められる。(3) その際、視野を一つの孤立した状況に限定して取り組むのではなく、むしろ総体的に進めていくことが必要であり、それは一つの修道院であれ一つの修道会であれ、修道院生活における個々の状況の絡み合いをつねに考慮することを含意します。つまり、そうした状況一つ一つを閉じたシステムとして分析的に理解する必要があるのです。

そうした重要な諸点を前提にすれば、我々のアプローチをわかりやすく説明できるかもしれません。しかしそのためには、さきほど申し上げたように、中世の修道院生活とはその本質と文脈とにおいてどういうことを意味していたのか、我々の理解を概観することが必要となります。

一般的にヨーロッパ中世の示す典型的な特徴は、世俗的存在の内在性を神の

超越性の理解から厳格に規定するということにあって、神は世界を支配し、神自身は意のままにならないと思われていました。キリスト教信仰が文化的基盤になっていたのです。宗教と教会は生活のすべての局面、すなわち日常生活、政治、法、経済、科学そして芸術において、規範として、そして究極的な根拠として存在していました。我々の考えでは、修道院生活をこの文脈に落とし込んで整理していくことが最初の基本的なステップとなります。これにより、たんに神の命に従う以上のことが、修道士や修道女には求められていたことがわかってきます。彼らは、みずからの魂の栄光を望んで外界からの隔離をよしとし、みずからの自由裁量を放棄して修道院での共同生活の厳格な規律に服従しました。このことは理にかなっていました。というのも、移ろいやすい地上から離れ、厳格に組織された秩序の調和に埋め込まれることで、一つの決定的なことが他のどこよりも保証されているように思われたからです。それは、正確には神の超越を理解するだけでなく、互恵的な愛によって自分自身の魂のなかに神の家を建てて神に差し出し、実質的に「魂の修道院」を建てるよう努めることを要請することによって、神の超越を魂にとって内在的なものにするということです。宗教的熱意――最後には恍惚とした熱情にさえなる――とともに求められたこの神との霊的な結合が、修道院の宗教性の核心でした。このことから他のすべての事柄の説明がつきます。

そういうわけで、このような宗教的熱意は、修道院世界の隔離された空間においてのみ実現可能であった、ということは完全にもっともらしいことだと考えられます。修道院世界は内と外の明確な違いによって俗世から解放されましたが、それは、遍歴する托鉢修道士の例からもあきらかなように、実際に境界となる壁の建築に頼っていただけではなく、世俗を排除する生き方をもたらす内面的なありかたの方がより重要でした。「修道院に入ると、皮膚から皮膚、持っているすべてのものをみずからの魂に捧げ、古い人間を捨てて新しい人間を取り入れ、新しい人生の形に進化するのである。」ムチエ＝ラ＝セル（Moûtier-la-Celle）修道院長のペトルスが、12世紀に世俗と修道院のあいだに霊的な線引きをしたときの言葉です。その線を個人として越えるためには、後戻りのできない「神に対する心の完全なる転向（*conversio totalis ad Deum cordis*）」が必要でした。

このような文言からは、忍耐、断食と肉の禁忌、沈黙、観想の準備、徹夜の

祈り、身体的な苦行に従うことの正当化が見てとれます。またこれらのなかには、一方では最大の悪徳としてのうぬぼれと傲慢（*superbia*）の回避に関連して、他方では完全な徳としての謙遜（*humilitas*）に努めることに関連して、こうした人生の転向のための決定的な基本要件が認められます。また、この転向は修道院のなかでのみ現出するもので、広く普及した文学的ジャンル、すなわち教訓、指導および説諭のための論考（Traktat）を通じて、修道院で何度も何度も心に呼び覚まされました。我々はとくにこの種の論考を研究し、編纂もしています。

修道院共同体は、地上の栄枯盛衰から確実に解放されたいという願望を象徴的にもまた表現していた、という洞察は、我々の研究にとってきわめて重要な意味を持ちます。それはたとえば、中世において、男女を問わず修道院でいつも同じ日課に従い、ミサと祈り、睡眠と起床、労働と食事の連続を毎日繰り返して実践していたときです。そのとき彼らは、直線的な時間ではなく共同体の循環する時間のなかで生きていたため、時を超えた永遠なるものを比喩的に想像できました。それはまた、典礼で詩篇を唱えるとき、ベネディクト会士による貧者の洗足のような儀礼のとき、あるいは日々の平凡な労働のあいだに聖句を聞き唱えることにより、神の啓示の永遠の真理に相当するものがつねに感覚的に現前したとき。あるいは、定期的に開かれる懺悔集会でみずからの外側に現れた過ちを共同体の前で告白し、これを最後の審判のイメージとして理解したときもそうでしょう。地上の存在と天国の秩序との調和を実現するという修道生活の意図が、ここに挙げたすべての例のなかで、実際に行われながら同時に制度的に強固になった実践において象徴的に表れていました。

このような精神的かつ霊的な感性の構造は、我々にとって多様で複雑な研究分野を意味しており、我々は抽象的な術語を用いつつ非常に具体的な方法でこれを概念化し、個々の修道院、修道院のグループ、そして修道会を具体的に比較することで分析を行っています。この方法を用いて、我々は、たとえば良心、清貧、従順、慈愛といった道徳生活上の主な概念、あるいはカリスマ、神の代理、正義、革新、孤独、観想、そしてたとえば（数日前の岡山でのシンポジウムのように）司牧のような精神生活のキー概念に専念しています。そして、それらがどの程度表れているかについて、異なる修道院共同体、異なる時代のあいだで比較検討しています。その成果は、我々の「ウィタ・レグラーリス」シ

リーズの論文集として多く刊行されました。

我々の研究にとってとくに重要なものとして、修道院生活の基本的な局面がもう一つあります。それはすなわち、修道院での生きた信心には、二つの特異な緊張領域があるということです。一つは、修道院共同体の求めるものと、修道院における各個人の欲求とのあいだの競合でした。個人は、自身の救いを希求しながらも（あるいはまさにそのために）共同体の戒律に従わなければなりませんでした。もう一つは、かたや完全なる神の超越性と、かたや依然として世俗的で肉体的物質性に縛られ、完成まで道半ばの個人および共同体の状態とのあいだの根本的緊張でした。これら二つの緊張領域は、修道院での宗教生活の規範的な礎石を表します。第一に個人と共同体、第二にこの世とあの世、そしてまたそれらは解消不能だったため、組織の規定によってバランスを保つことが課題となっていました。

ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーがすでに認識していたのは、修道士の生活の仕方は「合理的成果」にもとづいた「計画的な経営」によってしか維持できない、ということでした。中世の修道院は生活形態を厳格に組織することにより、恍惚たる熱狂をともなう生活スタイルの意味を維持するために、まさにこのように計画的に導入された合理性を発展させました。そのため修道戒律は、つねに二つの補完的な指針のカテゴリーを提供していました。さらに戒律は霊的ツールを提示し、人はその助けを借りて、魂に内在する魂の完徳に向けて選ばれた経路をうまくたどることができるのです。このことについて、『ベネディクト戒律』の序文の文言はすでに意義深いものです。「子よ、心の耳を傾け、師の教えをつつしんで聴け。そして慈しみ深い父の勧告を喜んで受け入れ、これを積極的に実行に移せ。」他方、この修道戒律は修道院メンバーに役割と権能を割り当て、厳格な義務に彼らを服従させて逸脱を防ごうとし、また組織に関する行動パターンの一つの領域を成文化していました。この行動パターンは、すべての霊的、肉体的、経済的な面について、つまり日課について、祈りについて、衣食について、正確かつ絶対的に生活を律していました。基本的に、戒律は法であるのみならず、宗教的な教化文書でもあるのです。

我々の研究にとって、この〔修道戒律の〕二面性はつねに、修道院組織の構造とメカニズムを比較にもとづいて広く検証したいという決定的な衝動をもたらしました。はたして修道士と修道女は当初から、しかしとくに12世紀以降、

法的規範と制度的統制の有効性を本当に十分なものとして信頼していたのでしょうか。このことを調べるためには、第一にさまざまなジャンルの法史料（とりわけ戒律とその註解、記録された慣習と決議条項）のあいだの区別を正確に線引きする必要がありましたし、これは今でもそうです。第二に、それら法史料を、12世紀のシトー会以降の修道会のような大きな組織体系の構築の基礎として評価できるようにする必要がありました。第三に、修道会内部の様々な構造を、比較しながら詳述する必要がありました。こうした構造は、自律的な法、代表機関としての総会、そして独立した巡察という三本柱がつねに存在していたにもかかわらず、様々な目的や伝統によってかなりの違いが生まれましたし、さらには――とくに司教や教皇の機関に向けて――様々なコミュニケーションの仕方を生み出しました。

したがって、我々はみずからのことを、霊性、信仰、祈りの歴史家、あるいはまた知性や学識の歴史家であるだけでなく、法、コミュニケーション、行政、統治の歴史家でもあるとみなしています。しかし我々は、これらを切り離して見ることのないように気をつけています。なぜなら――さきほど強調したように――「修道生活」という現象は、システムのあらゆる作用を観察し、異なるシステムと比較することを含めて、全体的にしか分析できないと考えているからです。

このアプローチにおける我々の研究の特異な立場は分かっています。にもかかわらず、今日の私の講演ではある主要な観点がいまだに欠けたままです。それはつまり通時的構造であって、これは修道生活の成立、変化、惰性、衰退または改革といった従来の構造を意味します。我々の構造的分析や全体的視点の実例を提供するために、先に触れたように、今からこの通時的構造についてより詳しくお話したいと思います。

修道院世界を理解するうえで、通時的構造は大きな証言能力を有します。一方では発展、分岐、継続ならびに中断、更新、影響、干渉、そして区別などの総体が重要だと言ってよいでしょう。しかし他方では個々のグループ、修族または修道会の内部で、たとえば創建、制度的安定、変容、弛緩、改革など、膨大な量の固有のプロセスも開かれていました。

こういった通時的構造は、規模の大小を問わずつねに外因性の史的展開と偶然の帰結でもありました。しかし、これは興奮するほど目新しいものではあり

ません。私にとって非常に注目すべきことに思えたのは、むしろ修道院世界には、きわめて特異な歴史性を生み出し、全体としてプロセスの形態のレパートリーを明確にする内在的要素があきらかに存在した、という事実でした。このレパートリーは、繰り返されただけでなく、拡張し、変化するなかで具体化していきます。このような内在的要素は、ほとんどの場合ひとりでに成立しましたが、プロセスを正しい方向に導くために、一貫して修道院制度そのものによって設計されることもありえました。

こうして内在的に発展した通時的構造は、分析的に把握し説明することができます。たんにまだ行われていないというだけで、これは修道制の特殊性について重要な洞察を提供するはずです。すなわち我々は、一方で修道生活が移ろいやすい世俗を去って最終的な救済の望みのための堅固なシェルターに向かうことを意味していた、ということを認識しなければなりません。しかし他方で、この生活の制度的形態は、かつてマリ＝ドミニク・シュニュ（Marie-Dominique Chenu）が言ったように「地上の庵（*cellule terrestre*）」を形成していました。それゆえ、人間の不完全さと同じくらい、世俗の環境に依存していたのです。したがって、決して堅固でもなく、つねにそれ自体も変化している状態でした。ですから、もし分析的に修道院の「生活形態（*forma vitae*）」の核心まで分け入りたいと思うのであれば、固定した戒律、儀礼、規則によって特徴づけられる安定性と、攪乱、欠乏、ニーズの変化によって特徴づけられる不安定性とのあいだのこの緊張領域の帰結にまさしく目を向ける必要があります。すなわち、特定の通時的構造に目を向けなければいけないのです。これは新しい叙述（ナラティヴ）を生み出すかもしれず、中世の修道制に対する我々のイメージを、まったく異なる光のなかで見るとまではいかないにしても、かなりの程度研ぎ澄ますことが可能な、新しい叙述になるかもしれません。

修道院世界の通時的構造は、決して現在から回顧することでしか確かめられない結果というわけではありません。すでに中世において、ご存じのように、それらは重要な鍵であると考えられていました。修道院の生活様式がどのような影響力を持ちえたか、またそれがどのようにして何度も何度も新しい立場を獲得し、変化し、革新的形態を発展させることができたのかを理解するための鍵です。そこには、一つの同時代史的な側面として、たとえば新しく出現した修道形態の多様性を忌避する姿勢と、12世紀のプレモントレ会士ハーフェルベ

ルクのアンセルムスが説いたように、それを変化する時代のニーズに従って注がれた聖霊の多彩な賜物として説明することのあいだの対立も含まれますし、あるいはまた同時代の有名な『諸修道会に関する書（*Libellus de diversis ordinibus*）』の釈義にあるように、旧約聖書の出来事の寓意的な連続として、またはそれと並んでキリストの生涯として、当時の修道形態の役割を救済史の文脈で解釈していたことも含まれます。

しかしこれについては、13世紀の偽ボナベントゥラに見られるように、一つの修道会が基本的に永続しえない理由や、当初共同体を支えていた人々が死に絶えたり、若者にとって厳しさの模範となるには弱くなりすぎたりして、輝かしい初期のイメージが薄れ、ありもしない寓話としてしか現れないという事実が考察されました。ペトルス・ウェネラビリスは、この構造を、彼の批判者であるクレルヴォーのベルナールに対して一文で伝えようとしました。「古いものを保持するよりも、何か新しいものを見つけるほうが容易である」と。しかしながらシトー会士は、総会の役割に関する『愛の憲章（*Carta caritatis*）』の原理的な一文の助けを借りれば、この問題を回避できると考えていました。「聖戒律、もしくは本修道会の規律遵守に関して、もし何か修正すべき点、あるいは付加すべき点があれば、これを取り決め、相互の平和と愛という善の促進を期すこと。」

修道院の通時性に関する中世の解釈の反対側には、広範なマクロヒストリーが展開していました。一方では、修道生活の個々の構成に関連しており、たとえばグランモン会の創始者ミュレのエチエンヌが、それまでのすべての戒律を根の二番煎じに見立てて、そこからのいかなる発展も否定し、自分自身を原初、すなわち福音書と同一視することでいわば逆行する追越しをしたとき、またはカマルドリ会士が12世紀の会憲の序文で、モーゼからキリスト、砂漠の師父、そしてみずからの創始者ロムアルドに至るまでの有名な隠修士らを連続的に描くことによって、救いを得るためにはその継続的な適合性ゆえに隠修制（ウィタ・エレミティカ）がもっとも確実な形態であることを示したとき、または個々のグループや修道会が、かつて歴史の深淵で聖なる人物によって始まった制度的な連続性を主張したときです（たとえばカルメル会の場合は預言者エリヤ、ハンガリーのパウロ会の場合はテーベの隠修士パウロ、聖アウグスティノ隠修士会の場合は聖アウグスティヌスなど）。

他方、このような解釈は、修道院の強力なグループの出現によってもたらされた、ある種の中断を経験したグローバルな通時的構造をも参照していました。他の修道形態と競合するなかで、それぞれの修道院は、ご存じの通り、キリスト教世界全体の救済に対する独占権を保持するものである、と主張していました。たとえば、1097年に教皇ウルバヌス 2 世はクリュニー修道会を「世の光」と呼び、それだけで世界は「明るく新しい」ものになる、としました。12世紀の論考は、律修参事会員を人類の「唯一の真の医学」であると特徴づけました。13世紀半ばには、ドミニコ会の百科事典編纂者であるヴァンサン・ド・ボヴェがフランシスコ会とドミニコ会を、フィオーレのヨアキムの言うところの第三の時代を形作るべく神が遣わした元気な若者と同一視しました。また同時期には、アントウェルペンのギラルドゥスの普遍年代記が、クリュニー修道院の創建を救済史の七番目にして最後の時代の始まりとしました。

しかし、修道会を一つ一つ切り離したとしても、それらをグローバルな比較のなかに、あるいは連続的な文脈のなかに置くことはできます。例を二つだけ挙げましょう。1234年のドミニコ列聖の勅書には、「不信心な者たちの信頼のなさを打ち消す」ためにキリストによって遣わされた預言者ザカリヤの 4 台の戦車についてこう書かれています。第一の戦車は殉教者を、第二の戦車は新しいイスラエルの代表としてのベネディクトゥスの息子たちを、そして第三の戦車はシトー会を表しています。しかしその後、黙示録的な「11の時間」に（…）神は、「それ以前よりも、さらにもっと力のある闘士たち」を集めました。すなわち、ドミニコの説教者たちとフランシスコの小さき者たちのことです。たとえば13世紀初頭の修道生活に関する最高の識者の一人であるジャック・ド・ヴィトリは、神は隠修士、修道士、そして律修参事会員にならぶ第 4 の修道制のタイプ、すなわち危険な現世の英雄として「小さき兄弟たち」を一見して創造したのであり、それによって修道生活を営む者の堅固な四角形の基礎が築かれたのだと主張しました。14世紀に、至聖救世主会の創始者であるスウェーデンのビルギッタは、主の新しいぶどう畑を作るよう命じられたと主張しました。そのぶどう畑の実りが徐々に育って、雑草が生えていた古い修道会のぶどう畑のうえに放射状に広がり、これを新しくする助けとするために、と。

これら解釈と構造化のすべてを簡単に紹介しただけで、修道生活はつねに変化し、時の経過とともに異なる状況にさらされるものであり、ヘラクリトスの

言葉を借りれば、人は「同じ川に二度足を踏み入れる」ことはできないということがはっきりと認識されていたことがわかります。しかし、ある種の規則性が考慮されていたこともまたたしかで、たとえば永続性や同時・逐次的な差別化、ならびに修正したり効率を高めたりする能力の価値を確信していたこともまた示されています。

こうした通時性を扱うかつての努力が、我々の課題設定にとってどれだけ重要なものであるかということを説明する必要はおそらくないでしょう。しかし方法論上強調するべきは、これは対象のレベルそのものの要素であり、まずは我々観察者のレベルとはかなり異なるアプローチを採用するべきだ、ということです。しかしそれでも、両方のレベルがすくなくともほぼ一致している場合は注目に値します。そして、これは通時的構造をグローバルに分析すればすでにそうなっているはずです。次の図〔省略〕は発展のネットワークを図式化したものです。

〔この図で〕私は西洋の修道制（ウィタ・レリギオーサ）の主なグループ（隠修制（ウィタ・エレミティカ）、参事会制（ウィタ・カノニカ）、観想修道制（ウィタ・モナスティカ）、俗人運動など）を異なる色で描き、それぞれの修道形態について、開始、断絶、変容、分岐を示しました。一定の取捨選択が必要でしたが、この通時的な全体構造から明確に認識できるのは以下の諸点です。

1．いくつかの時代の画期がはっきり見られます。一つはカロリング朝期で、「混合戒律（*regulae mixtae*）」を含む多様な戒律の時代が終わりました。第二の画期は11世紀から12世紀にかけての時期で、ベネディクト修道制による独占の時代が終わりました。第三の画期は13世紀後半です。あらゆるグループの修道形態が爆発的に成長した加速期が終わり、同時に活発な改革と分裂をともないつつ、既存のスペクトル（ただし大きな例外はデヴォティオ・モデルナと至聖救世主会）が存続する時代が幕を開けました。

2．すくなくともすべての修道院グループの組織構造を根底から変えた特徴的な転換点がありました。シトー会による修道会の発明と近代的で卓越した形態としての修道制（ウィタ・レリギオーサ）の全領域にわたる実践、そしてその後のドミニコ会による完成です。第四回ラテラノ公会議は、新しい戒律と修道会を禁止することで、まちがいなくこの構造の力学に影響を与えました。

3．一方ですべての段階にわたって強い連続性が認められますが、他方で後

発の新しいアプローチによる驚異的な飛躍や（ベネディクト会、聖アウグスティヌスの戒律、隠修制（ウィタ・エレミティカ）、女性のための戒律）、驚くべき変容（たとえば隠修士から托鉢修道士へ。これについてはあとでまた触れます）も認められます。

４．著しく後発の介入でありながら、その後強い影響を与えたものがいくつかあります（たとえば俗人運動や騎士修道会、施療院修道会などのいわゆる機能的修道会）。

５．アイルランド＝スコットランド修道制や、それよりもさらに広範な、つねに実験的で精神的なダイナミズムに満ちた隠修制（ウィタ・エレミティカ）など、原動力や強力な波が押し寄せてくる現象があります。

６．図の還元的な性質ゆえに、このネットワークの高度なダイナミズムを最初にあらわにした継続的な改革と相互採用はここでは見ることができません（ただしこのことについてはまたすぐに触れます）。また、信心、社会的ニーズ、教会概念の変化といった外在的な影響の詳細な刻印も省かざるをえませんでした。ここではわずかな事柄だけを指摘しておきましょう。たとえば9世紀から10世紀のノルマン人、サラセン人、ハンガリー人の侵入、11、12世紀の教会改革と信仰の精神化、12、13世紀の都市の勃興と専門的知識化、そしてコンスタンツとバーゼルの公会議で始まった改革です。

このような図式的解釈にもっと長い時間をかけることもできるのですが、ここでやめておくことにしましょう。しかしそれでも、通時的ネットワークのグローバルな分析のあとで、第二の分析的アプローチ、すなわち特定の通時的構造の分析に移ることが時間的に求められています。そうすることで、さきほどのグローバルな観点では扱うことのできなかった多くの課題が明らかになるでしょう。

残された時間はわずかですので、通時的プロセスのもっとも重要な形態を示したいと思います。実際はもっと区別しなければならないのでしょうが、できる限り簡潔に説明しましょう。そこではマックス・ヴェーバーのような理念的な方法を用いる必要があり、その目的のために友人であるデイヴィッド・ダヴレイ（David d’Avray）の用語学的・方法論的研究を参照します。

1．成立形態――ここでは、カリスマによる始まり（グランモン会、カルトゥジオ会、フランシスコ会など）か、会憲テクストや設立証書を根拠とする合理的・法的な始まり（たとえばシトー会の『愛の憲章（カルタ・カリターティス）』、テンプル騎士団の戒律、ドミニコ会の会憲、聖アウグスティノ隠修士会の1256年の教皇勅書など）の二者択一について強調することが不可欠です。

2．制度的永続のプロセスと適切な変革のメカニズムの創出――ここでは、永続や変革に必要な手段が創出されたり、持続可能な形が与えられたりした、いわゆる「第二世代」、「第三世代」現象（たとえばカルトゥジオ会のグイゴ、フォセのユーグ、クレルヴォーのベルナール、ボナヴェントゥラ、ペニャフォルテのライムンド）にとくに注意を払う必要があります。

3．制御、修正、弛緩、回復――これは、伝統的な慣習律や巡察および総会の何千もの記録に反映された日常的なプロセスと手続を扱うものです。このような構造は、冒頭の偽ボナヴェントゥラの引用ですでに言及しました。しかし、規約の序文（たとえば13世紀のクリュニー会のそれや、教皇による改革勅書のアレンガ）のほとんどが、いつも危険にされされた安定性、それゆえ不安定な安定性というこの問題を反映しています。原則、人は自分自身を変えることでしか変化に対応できず、結局のところ本質的な事柄のみ安定的なものにしておくことくらいしかできなかったのです。これについては、『愛の憲章（カルタ・カリターティス）』から引用した箇所だけでなく、たとえばペトルス・ウェネラビリスの決議集における例示的な序文でも、変わりうる美徳の道具（*adjumenta virtutum*）と不可欠な美徳そのものを区別しています――逸脱の是正に関しては、一方ではどれだけのケースが1年以内に日常的な問題として解決されうるか、また他方ではどれだけのケースがさらに手続きを経なければならないかが決定的な要因でした。私の研究によると、クリュニー会とシトー会は定型的なケースが約92％を占めており、これは高い安定性と管理手段の効率性を示す優れた兆候です。

4．画期の継承リズム――これは、ほとんどすべての修道制（ウィタ・レリギオーサ）の形態において、急進的な改革や大規模な法典化のイニシアティヴが一定の間隔でみられ、その結果それぞれの通時的構造が決定的に分割された、という観察結果を指します。このように、たとえばシトー会の場合、平均して23年ごと、つまり一世代ごとに蓄積された法的事項を新たに編纂し直し、『総会決議集成

（*Libellus definitionum*）』としてまとめていました。カルトジオ会もまた『慣習律補遺（*Supplementa ad consuetudines*）』によって同様のことをしています。対照的に、修道会の大改革（通常は教皇権が関与）は平均70年ごとと、はるかにまれでした。

5．変容――これは中世の修道院世界の顕著な特異性を表していました。もともとの「計画（*propositum*）」が根本的に変化することによって、変容は穏やかなものであったり突然のものであったり、強制されたものであったり望んだものであったりしました。多くの隠修士集団が聖アウグスティノ隠修士会に転向しその後托鉢修道士に仲間入りしたことや、カルメル山の隠修士がヨーロッパに移り托鉢修道会となったカルメル会がよく知られています。しかし、ほとんどすべての隠修士集団がやがて司牧の任務を引き受けるようになり、その結果むしろ聖堂参事会員に分類されるようになったことも見逃せません。ケレスティヌス会やパウロ会を例として挙げておきます。たとえばオバジーヌのエチエンヌの伝記から、変容がしばしばいかに困難で痛々しいプロセスをたどるか読み取ることができます。彼の隠修士たちは、まずはベネディクト会に、ついでシトー会に転身しなければなりませんでした。いずれにせよ、フランシスコ会は、俗人共同体から聖職者共同体への転向によってほとんど崩壊してしまいました。

頻繁に行われた相互採用の具体的なプロセスについてもう少し詳しく説明したいのはやまやまですが（代表的な例として中世初期に「混合戒律（*regulae mixtae*）」がきわめて一般的だったこと、具体的な例としてシュー渓谷（vallée des Choux）の隠修士たちがカルトジオ会とシトー会の両方の要素から組織を構築していたことなど）、ここで止めなければなりません。（フランシスコ会とドミニコ会のあいだのような）競争の加速化や、最終的に上位権力が課した規範への適応プロセスも取り上げたいと思っていたのですが残念です（聖ビルギッタの至聖救世主会が設立時に元々の戒律の施行に失敗していたことは、アッシジの聖クララの成功と対をなす適当な例となったでしょう）。

これまでの時間で、中世の修道院世界における通時的構造を重要な研究分野として概観できたのではないかと思います。ただ、ここではこれら通時的構造の本質的形態について、中世になされた考察の次元と現在の観察範囲の両方に

ついて、簡単な紹介を試みることしかできませんでした。しかしこれらの形態は、短い時間で可能であったよりもはるかに詳細に定義されなければならないでしょう。というのも、それらはいわばメタ歴史的なカテゴリーを意味していたからであり、そのなかで何世紀にもわたって具体的なプロセスが生起していました。これら個々のプロセスをたどり、比較し、類似点と特異点をあきらかにすることで、冒頭で主張したように、中世の修道制（ウィタ・レリギオーサ）の特異性をより明確に把握できる新しい叙述（ナラティヴ）が生まれることでしょう。

お話したすべての面で、我々の研究に興味を持っていただけたのであれば幸いです。我々は主にヨーロッパの修道院と修道会の比較史に取り組んでいますが、キリスト教圏外の修道生活の形態と比較する別の研究プロジェクトにも携わっています。そこではとくに、チベット仏教やインドのヒンドゥー教の共同体の規範的基盤に焦点を当てています。相違点や類似点を明らかにすることは、我々自身の文化への理解を研ぎ澄ますことにつながります。

結論としてもう一度繰り返すのであれば、「霊性」、「組織」、「法」、「象徴とパフォーマンス」、そして「文化と教育」の領域を含めて、我々の研究の方法論的指針は以下のようになります。

（1）修道院の実態やプロセスにおける構造的な諸関係の比較再構築

（2）具体的かつ状況的な状態からの抽象化

（3）閉じたシステムとして理解される修道院や修道会の全体的分析

これらはすべて、ただ一つの問いに答えることを目的としています。つまり、ヨーロッパ中世において修道生活はどのように機能していたのか、ということです。

日本における修道制研究：歴史と現在[1]

杉崎泰一郎

はじめに

皆様、本日はゲルト・メルヴィル教授ご臨席のもと、お話しさせていただけることをたいへんうれしく思います。メルヴィル教授には、日本へお越しいただき、貴重な交流の機会を与えてくださったことに、この場で心よりお礼申し上げます。そして、このシンポジウムを企画くださった大貫先生にも感謝します。

私の報告では、自分の経験をもとに1980年代以降の日本における中世修道院史研究の発展を概説的に扱います。主に上智大学中世思想研究所についてお話しし、ついでお世話になったヨーロッパの研究所、すなわちミュンスター大学の初期中世研究所 Institut für Frühmittelalterforschung（IFMA）、トゥールーズの南フランス・スペイン研究所 France méridionale et Espagne（Framespa）、ポワティエの中世文明高等研究所 Centre d' Études Supérieures de Civilisation Médiévale（CESCM）、オセールの中世研究所 Centre d'Études Médiévale（C.E.M）などについて触れてまいります。

まず初めに、日本における修道院史研究史の一側面として、僭越ですが私の研究について手短に紹介します。主に私は11、12世紀の「黒衣の修道士」（いわゆるベネディクト修道士）の歴史に関心を持ってまいりました。2010年の夏・冬学期の間に南西フランスのトゥールーズ大学に滞在した折に、同地域にあるベネディクト系のモワサック修道院の歴史に興味を持ちました。この修道院は1050年代ころからクリュニー改革の導入によって発展し、フランス南西部で重

[1] 本稿は2019年3月4日に慶應義塾大学三田キャンパスで行われた国際シンポジウム「日欧における中世修道制史研究の過去と現在」のなかで Die Klösterforschung in Japan: Geschichte und Gegenwart と題して行った講演原稿（大貫俊夫教授の和訳）に加筆修正したものである。

要な役割を演じたのですが、美術史以外の領域ではあまり注目されてきませんでした。史料は未だに詳しい調査がされておらず、多くは未刊行なこともあって、歴史研究はほとんど進んでいません。そこで現地の文書館やパリの国立図書館に保管されている数多くのモワサック修道院の史料にとりくみました。そして証書や年代記だけでなく、慣習律、典礼規定、殉教録や聖遺物リストなども歴史研究の上で重要なものと分かりました。これらの史料は教皇による祭壇の聖別、聖遺物の収集、聖人や聖遺物への崇敬の拡大、そして修道院施設の建設を通して、修道院が地元の社会における聖なる場所、空間としての地位を確立していったことの証であるからです。トゥールーズ滞在の終わりに、小さな研究集会を行うことができ[2]、後にこのテーマに関する論文をフランスとベルギーで刊行することができました[3]。

さて私が学部生や大学院生のころに時間をさかのぼって、修道院史の研究を進めるために不可欠だった上智大学中世思想研究所の活動を振り返ってみたいと思います。同研究所は日本における修道院史の研究だけでなく、中世研究に大きく貢献してきて、いまでも大きな役割を果たしています。それではこの研究所の活動をみていきましょう。

Ⅰ．上智大学中世思想研究所：設立と発展

研究所の公式の英語名称は “Institute of Medieval Thought” です。1956年に「中世哲学研究室」として、文部省の援助のもと上智大学、東京大学、慶応大学、聖心女子大学、東京都立大学の中世哲学研究者の共同で設立されました。研究

[2] 2011年 1 月28日にトゥールーズ大学の研究所 Framespa の研究活動の一環として、ポワティエ大学から Edina Bózoky, Cécile Treffort をお招きして Le culte et l’objet, la mise en scène par les religieux et les laïques dans le sanctuaire と題する研究集会を開いた。研究報告は下記の形で刊行した。Le culte et l’objet à l’abbaye de Moissac après son affiliation à l’Abbaye de Cluny, dans *Mémoire de la Société Archéologique et Histoire de Tarn et Garonne*, 2014, pp.9–17.

[3] Mise en scène juridique et liturgique autour de l’autel et des reliques de l’Abbaye de Moissac : la politique de l’abbé Ansquitil（1085-1115）au travers des actes, *Annales du Midi, revue de la France méridionale,* tom 128, n°294, 2016, pp.179–190, Notes sur le culte des saints et des reliques à Moissac（XIe–XVIe s.）, *Le légendier de Moissac et la culture hagiographique méridionale autour de l’an mil*, Brepols, 2018, pp.479–507.

所は上智大学のキャンパス内、哲学科の建物にありました。1974年にクラウス・リーゼンフーバー神父が研究所長となって、研究所は30年にわたって様々な点で発展してきました。1976年に研究所は「中世思想研究所」として改組され、1984年には新築された大学図書館に移転し、規模と活動の幅を広げていきました。

リーゼンフーバー神父はドイツ出身のイエズス会修道士であり、優れた哲学者であり神学者でした。彼は1965年にミュンヘン大学でスコラ神学に関する博士論文を書き、1969年から2009年まで、流ちょうな日本語で上智大学文学部哲学科で中世哲学を講じました。彼はとりわけスコラ哲学やドイツ神秘主義の研究に取り組み、日本における中世哲学研究の発展に貢献しました。とりわけ研究書の出版や中世哲学会など日本の学術界での活動は輝かしい成果を収めました。いっぽうキリスト教の普及活動も積極的に進め、毎日のように多様なキリスト教関係の講座を行っていました。キリスト教入門講座、神学書の講読、瞑想集会は学生だけでなく一般の参加者にも開かれていました。リーゼンフーバー神父は惜しまれつつ、2022年 3 月にお亡くなりになりました。

Ⅱ．研究所の蔵書

現在、研究所には佐藤直子所長のもと、上智大学の教員である10名の研究員が所属しています。加えてさまざまな大学に所属する 2 名の客員所員ならびに10名の準所員が研究所のメンバーとなっています（2024年 2 月現在）。彼らの専門領域は古代から近代にわたって、哲学、神学、倫理学キリスト教史、美術史、音楽学など多岐に及びます。

私は公式に同研究所に所属したことはなかったのですが、学生時代よりこの研究所で多くを学びました。中世修道院の歴史を理念、規範、生活、典礼といった側面から研究する方向に私を導いたものは、おそらくこの学術的な環境だったのでしょう。私は卒業後も研究所の蔵書を利用していますが、それは蔵書が上智大学の学生や教職員だけでなく、日本にある以下の 6 の学術団体の会員にも開かれているためです。それは中世哲学会、日本西洋古典学会、西洋中世学会、教父研究会、新プラトン主義協会、そして東方キリスト教学会で、学外の多くの研究者が豊かな蔵書を利用しています。

研究所の蔵書の多くは、現在大学図書館の 8 階にある研究所近くの書架にあ

り、和書 2,634 冊、洋書 59,257 冊と和雑誌18 誌 洋雑誌78 誌を所蔵しています（2022 年 3 月末現在）。分野は主にヨーロッパの中世哲学、歴史、文学、芸術、法そして医学です。さらに刊行史料、事典および一般向けの入門書も所蔵しています。研究所独自の蔵書検索システム Benedictus でインターネット検索ができます。多分野の中世研究に関わる専門書のコレクションは、日本随一のものといってよいでしょう。いまでも中世の哲学、歴史、教会、芸術、文化そして自然科学の研究者と学生にとって、この蔵書は貴重なものとなっています。

この蔵書がなければ、私はカルトジア（シャルトルーズ）会の歴史についての卒業論文や修士論文を書くことはできなかったでしょう。それは1980年代の「アナログの時代」で、学生にとって海外の情報を自力で探し、必要な本や史料を入手することは困難でしたので、この蔵書にたいへんお世話になりました。とくに研究に必要な雑誌や史料を読むことができたのは幸いでした。例えば *Revue Mabillon*、*Subsidia Hagiographica*、*Studi Gregoriani*、*Corpus Consuetudinum Monasticarum*（『修道院慣習律集成』）などを手に取ることができ、研究叢書として *Vita Regularis* も参照しました。おかげで私は最新の研究動向を追うことができ、また史料を早く開拓することができました。ちょうど当時刊行が始まったカルトジア会に関する定期刊行物 *Analecta Cartusiana* は、私の研究にとって重要で不可欠のものでした。カルトジア会（本部はラ・グランド・シャルトルーズ修道院）は、いまでは映画『大いなる沈黙へ』などで広く知られるようになりましたが、歴史研究が本格的に始まったのは1980年代のことで、日本で情報を得るのは困難な時期でした。研究所が同修道会に関する文献を収集してくれたことに大いに感謝するとともに、その先見の明に感服したものでした。

さらに付け足すと、上智大学の大学図書館は、多くの中世研究者が使用できる重要な書籍を数多く所蔵しています。すなわち、例えば *Patrologia Latina*（『ラテン教父全集』）や *Corpus Christianorum*（『キリスト教著作家全集』）、*Sources Chrétiennes*（『キリスト教文献叢書』）ならびに教会史に関する研究シリーズや定期刊行物といった、重要な作品集、史料集です。いまその多くは電子媒体で閲覧できるようになりましたが、紙媒体ならではの利点を生かせる場となっています。

Ⅲ．出版

a.『キリスト教史』全巻の翻訳

修道院史の研究にとって、蔵書の蓄積だけでなく新たな書籍の出版が重要なことはいうまでもありません。研究所はヨーロッパ諸言語で書かれた専門書の日本語訳を出版してきました。なかでも歴史研究者にとって重要なものは、1981年から1982年にかけて刊行された『キリスト教史』全11巻です[4]。これは1963年から1978年にかけてドイツ語、フランス語、英語、オランダ語で同時出版された通史の翻訳で、研究所はこれに日本語の索引（人物、物事、聖書引用箇所など）、日本語の文献を含む新しい文献目録、そして日本の教会史に関する数章が付け加えられました。これは日本語で読める教会史の本格的な通史という点で、重要な業績といえます。中世を専門とする私にとって幸運なことは、卒業論文を書いていたときに、教会の起源から宗教改革までを扱った5巻は出版されていたことです。確かにそのころデイヴィッド・ノウルズの著作の翻訳など、修道院史の概説書は日本で出版されていましたし[5]、*Handbuch der Kirchengeschichte* のような欧文の代表的な通史も[6]大学の図書館で読むことができました。しかし中世思想研究所で編訳した『キリスト教史』は、教会史ならびに修道院史の概説を提供してくれる貴重なものでした。そして1990年代に全巻がペーパーバックの形で刊行されました[7]。これは今日でも教会史を学ぶ学生には不可欠の通史となっています。

b.『中世研究』シリーズ

研究所によって出版されたシリーズの中で、1990年代に全10巻で刊行された『中世研究』についてお話します。各巻は主として日本人研究者が日本語で書いた、だいたい10本程度の論文を収録しています。論文のテーマは、主に中世の思想、歴史、文化などですが、イスラームの歴史叙述や東方教会の隠修士に関するものは、日本では希少な文献と言えましょう。ちなみにシリーズのうち2巻、すなわち第1巻『聖ベネディクトゥスと修道院文化』（1998年刊）[8] と第8

---

[4] 講談社からハードカヴァーで出版された。

[5] *Christian monasticism,* 1969 朝倉文市訳『修道院』平凡社、1972年。

[6] Hrsg. von Hubert Jedin, Freiburg, Herder, 1962.

[7] 1996年から97年にかけて平凡社から『平凡社ライブラリー』として出版された。

巻『中世の修道制』（1991年刊）は私の専門領域に直接関わるものです。『中世の修道制』の巻に、私は論文「隠修士とその時代――ラ・グランド・シャルトルーズ修道院を中心に」を[9]、『聖ベネディクトゥスと修道院文化』の巻には「クリュニー修道院における救済の構図――ペトルス・ウェネラビリス『奇跡について』を中心に」を寄稿しました[10]。これら 2 巻の内容を見てみると、日本においてすでに1990年代には古代から近世にかけての修道制の歴史について、次のような重要なテーマについて専門的な研究が行われて、論文が書かれていたことが分かります。すなわち「東方キリスト教修道制の起源と展開」、「ビザンツの修道制」、「ガロ・ロマン末期のローヌ修道制」、「アウグスティヌスの修道霊性」、「聖ベネディクトゥスの『戒律』とその霊性」、「混淆戒律時代におけるベネディクトゥスの『戒律』」、「中世の写本処」、「モンテカシノの『デシデリウス文書』における絵画」、「サン＝ティエリのギョーム小伝」、「シトー創立と「使徒的生活」」、「騎士修道会の創設とその日常生活」、「最初の律修参事会－プレモントレ会の創立」、「フランシスコ会の創立をめぐって」、「ドミニコの霊性と説教者兄弟会」、「ベルギー中世のベギン運動」、「イグナティウス・デ・ロヨラの神秘体験――イエズス会の霊性の起源」などです。

研究所の編集意図は、主に修道院や修道会設立の理念や戒律、修道院における日常生活や霊性に関する研究を日本で刊行し、研究を促進するためであったと思われます。今後は日本における研究を広げ、国際的な交流の機会をつくるため、新たなテーマに関する研究文献が、できればヨーロッパ諸言語で刊行されることを望んでいます。

c. 『中世思想原典集成』*Corpus fontium mentis medii aevi*

このシリーズは中世思想原典集成というタイトルがすでに示しているように、主にキリスト教神学と哲学や聖人伝と修道規則など信仰実践に関わるテクスト翻訳を収集したものです。それぞれの翻訳テクストには、それぞれの訳者による紹介と注解が付されています。日本において画期的だったのは、イスラーム哲学の著作を集めた第11巻と、女性神秘主義者の著作を集めた第15巻と思われます。いわば第 1 期のシリーズが1991年から2002年まで全20巻と総索引が平凡

[8] 1982年に雑誌タイプで刊行されたものを増補して、論文集の単行本としたもの。
[9] 『中世の修道制』、創文社、1991年、pp.121–143。
[10] 『聖ベネディクトゥスと修道院文化』、創文社、1998年、pp.149–168。

社から出版されています。そして第2期の出版が2018年から始まっています。

修道院の歴史を研究する者にとっては、とりわけ会則や聖人伝、書簡の翻訳が重要なものといえます。中世の修道院の数多くの会則や戒律、規約のなかから、バシレイオス、アウグスティヌス、アルルのカエサリウス、ヌルシアのベネディクトゥス、シャルトルーズ（カルトジア会）、シトー会そしてフランシスコ会のものが翻訳されました。加えてエジプトのアントニオスやトゥールのマルティヌス、ヌルシアのベネディクトゥス（グレゴリウス1世の『対話編』）の伝記（聖人伝）や、ペトルス・ウェネラビリスの『奇跡について』のような奇跡物語、著名な聖職者や修道士の書簡は、教会や修道院の歴史のみならず、中世の人々の価値観を研究するうえで貴重な史料です。この翻訳の影響がいかに大きいかは、ペーパーバック版が出版されたことからもわかります[11]。

『中世思想原典集成』の出版は、私にとって12世紀の修道院についての博士論文を執筆する助けとなりました。加えて当時若手研究者だった私に、研究所が『中世思想原典集成』所収の翻訳を依頼してくれたのは、大きな意味がありました。翻訳を依頼されたテクストは、ちょうど私が博士論文のために分析をしていたもので、すなわちグイゴ著『シャルトルーズ修道院慣習律』Guigo, *Consuetudines Cartusiae*[12]、クレルヴォーのベルナルドゥス著『ギヨーム修道院長への弁明』, Bernhard de Clairvaux, *Apologia ad Guilhelmum Abbatem*[13]そしてペトルス・ウェネラビリス著『奇跡について』Petrus Venerabilis, *De Miraculis,* の抜粋[14]です。私の博士論文は1999年に上智大学に受理されました[15]。そこではクリュニー修道院の史料（主にペトルス・ウェネラビリスの『奇跡について』）といわゆる「改革修道院」の史料（聖人伝、会則、シトー会やカルトジオ会の書簡など）を扱いました。これらの文書の翻訳と注解文の執筆は、文書をより深く分析し、文書の成立と伝来について把握し、それらを歴史的文脈の中で理解するよい機会と

[11]『中世思想原典集成　精選』（平凡社ライブラリー）全7巻。

[12] グイゴ著『シャルトルーズ修道院慣習律』『中世思想原典集成』第10巻、平凡社、1997年、pp.219–290。（高橋正行氏との共訳）

[13] クレルヴォーのベルナルドゥス著『ギヨーム修道院長への弁明』『中世思想原典集成』第10巻、平凡社、1997年、pp.459–489。

[14] ペトルス・ウェネラビリス著『奇跡について』『中世思想原典集成』第7巻、平凡社、1996年、pp.666–669。

[15]『12世紀の修道院と社会』原書房、1999年。

なりました。パリの国立図書館で、テクストの正書法を確認したり、文書の隅のメモを探したり、写本間の章立てや区切りを比較する調査もしました。特に重要な発見はありませんでしたが、この作業はとても楽しいものでした。

結びと展望

私が博士論文を執筆していたとき、クリュニー修道院に関する研究に大きな動きがあり、これに関心を持ちました。すでに10世紀から12世紀にかけてのクリュニー改革の広まりと、それに関する聖俗権力の研究などはさかんに行われていましたが、重要な史料の批判的分析は十分になされてはいませんでした。この問題に取り組むため、私はミュンスターの初期中世研究所 Institut für Frühmittelalterforschung でクリュニーの証書のデータベース作成に関わっていた Franz Neiske 先生と Maria Hillebrandt 先生のもとで情報交換をしました。このデータベースはのちにインターネットで利用できるようになるのですが[16]、そのころは研究所内でしか使用できなかったため、お二人のご好意によって史料の検索作業をすることができました。またお二人は直近の研究動向についてさまざまな貴重な助言を下さいました。おかげで、そのころパリの Dominique Iogna-Prat 先生を中心とするグループが、主にオセールの中世研究所 Centre d'études médiévales で行っていた研究集会にも参加し始めました[17]。

2010年の夏、冬学期に研究専念期間をいただいたのが、クリュニー修道院設立1100周年にあたっていたため、関連の研究集会が各地で開催され、参加することができました[18]。そのほかに、ラングドックのドミニコゆかりの地で毎年行われるファンジョーの研究集会 Colloque de Fanjeaux などにも参加しました。2010年の集会は Michel Lauwers 先生が「聖なる場所と教会空間 Lieux sacrés et espace écclesiale」に関するものを開催され、これは教会や修道院の歴史にとっ

[16] CCE: cartae cluniacenses electronicae（IFMA）Recueil des chartes de l'abbaye de Cluny - Auguste Bernard - Alexandre Bruel（uni-muenster. de）.

[17] 2005年 6 月27日から29日に行われた研究集会 La spatialisation du sacré dans l'Occident latin（IVe–XIIIe siècle）など。

[18] 同年 9 月の創立記念日にクリュニー修道院跡で開催された国際研究集会 Cluny, le monachisme et l'émergence d'une société seigneuriale など。

て新しい理解をもたらすものでした[19]。それまで主として修道院の生活や組織を研究してきた私にとって、聖遺物が収められた祭壇を中心とする聖なる空間の形成や、そこで行われる儀式が、修道院にとってのみならず社会的な意味を持っていることを研究する新たな刺激となりました。そして研究期間の終わりに、「はじめに」で申し上げまたように、トゥールーズで研究集会を開催し、その後も現地でいくつかの報告ができたのも、これらの学会や講演会への参加に加えて、国際的、学際的な研究者たちとの交流によるものでした。ちなみに研究集会にお招きしたCécile Treffort先生からお誘いを受け、2013年の6月にポワティエの中世文明高等研究所Centre d'études supérieures de civilisation médiévaleが毎年開いている中世研究週間Semaines d'études médiévalesに赴いて、Le culte des saints et la collection des reliques（XIe-XVe s.), à travers des sources de l'abbaye de Moissacと題する講演を行いました[20]。この催しは、同研究センターが大学院生を中心とする若手の研究者向けに毎年2週間ほど行っているもので、全世界から100人近い参加者が集まります。パーティーや教会見学ツアーもあり、多国籍の若手の研究者や講演を行う研究者たちとの交流は有意義なものです。

日本の修道制研究には、様々な領域、とりわけ古文書や哲学、美術史、考古学、建築といった分野の歴史家との、国際交流や学際的な協力がきわめて重要であると考えます。研究所の支援やインターネットを通じてのやりとりに加えて、本日開催されたこのシンポジウムのような、研究者のあいだの交流や協力の機会も大切でしょう。それは、とりわけ若い世代の研究者にとって貴重なものになると思います。

ご清聴ありがとうございました。

---

[19] 2011年にPrivat社から同タイトルの論文集の形で刊行されている*Cahiers de Fanjeaux* 46。

[20] 講演を加筆修正して刊行した。Le culte des saints et la collection des reliques（XIe–XVe s.), à travers des sources de l'abbaye de Moissac, dans *« Si est tens a fester » Hommage à Philippe Walter*, Études réunis par Kôji Watanabe, CEMT Editions, Tokyo, 2022, pp.155-167.